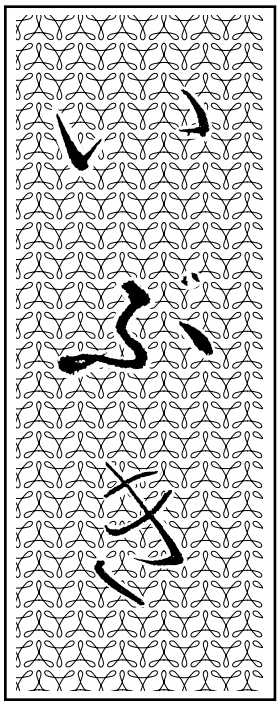


「マリア観音像」
（キリスト教文化センターに展示中の
「隠れキリシタン遺品収集」より）

腎泌尿器外科学教授・キリスト教文化センター長

力石（ちから いし） 辰也

本年7月17日、改正臓器移植法が施行され、生前本人が臓器提供を否定していなければ、家族の書面による同意だけで脳死判定や脳死下の臓器提供が行なえるようになりました。9月11日の時点ですでに8例の脳死下臓器提供がこの新しい法律に従って行われています。日本でも脳死が人の死か、臓器提供が是か否かという二元論的な議論が行われた時代は次第に過ぎ去りつつあり、脳死を認める人、認めない人、臓器提供を希望する人、希望しない人、移植を希望する人、希望しない人、それぞれの考えや意思を互いに尊重できる成熟した時代・社会に移行しつつあるのだと思います。

かつて日本の社会は、死を縁起の悪いこと、忌み嫌うべきことと考え、死というものを直視してきませんでした。現代でもその傾向は残っています。しかし、死は誰にでも平等に、必ず訪れるものです。死なない人はいません。現代人は多様化する価値観の中で、もしかすると突然訪れるかもしれない自らの、あるいは家族や大切な人の死についても考えておく必要があるのです。臓器移植法の改正は個々の日本人に、自分や家族の死について考えるきっかけを改めて与えてくれたとも言えそうです。家庭の団らんで突然話題にするには死や臓器提供は重たすぎるかもしれませんが、何かをきっかけにして家族内でよく話をし、個人の意思を確認しておくことが重要なのだと思います。

私たちは医学部や病院に所属する人間として、ある意味では死というものが身近にある環境で暮らしています。しかし、死とは普段私たちが慣れ親しんでいる医学や医療ではすべてを理解することができない世界です。自らの死に対する考えを確立するには文学・哲学・宗教学・死生学・倫理学など様々な知識が必要な場合もあるでしょうし、あるいはごく自然に、本能的に死を理解し、受け容れることができる場合もあるのでしょう。同じ人でも年齢や健康度によって考え方はかなり異なってくるに違いありません。これから秋の夜長を迎えます。時には虫の声を聞きながら生や死について考えることも悪くないかもしれません。

学生による「デス・エデュケーション」（死への準備教育）の会発足

◆2年　藤田　陽子

今年5月にデス・エデュケーションの勉強会を発足させました。メンバーは1年生から4年生まで15名程度。活動内容は、ホスピス訪問、生と死の現場で活躍されている方を招いての講演会、哲学講師と共に行う生命倫理の勉強会、メンバーによる意見発表会です。

私は以前、「癌の疑いあり」と診断されたことがあります。まず、新聞等で見聞きする抗癌剤治療の副作用や家族への負担が、我が身に襲いかかることへ大きな恐怖を感じました。次に自分の人生を振り返り、一点だけ深く後悔をしました。それは健康な身体を持っていながら、生活上の都合で出産を先延ばしにしていたことです。もし癌なら、新しい命が生まれる可能性を永遠になくしてしまう、と愕然としました。残していく家族のためにも命をつなぐことは何よりも大切だと気付き、癌と闘いながら出産することが可能であれば、自分の命をかけて最後の挑戦をしたい、と強く思いました。

その後の精密検査で癌ではないと診断されましたが、私はこの経験から多くを学びました。死を意識したときの心の動きは人それぞれですが、私のように命の大切さに改めて気付くこと、そして自分にとって最も大切なことが鮮明になり、果たすべき任務のために力が涌くということがある事実を知ったのです。

私たちは患者さんに最良の医療を提供し共に闘えるよう勉強を重ねていますが、治療が困難であると判断したとき、私たちに一体何が出来るのでしょうか？また、重症度に関わらず病気になった時の不安な気持ちは、本能的な死への恐怖とつながっているかもしれません。だからこそ、死についても多面的に学んでおくべきだと考え、この会を発足させました。

死は人間にとって自然な現象ですが、できれば直視したくないものです。そう考える背景には文化・経済・社会的要素が絡み合っています。生や死を取り巻く環境を理解し、多様な価値観に触れ、そして自らの死生観について考え続けることで、患者さんの心を受け止められる医師になりたいと考えています。

今後はキリ文を活動場所として時々使わせていただく予定です。ステンドグラス越しの美しい陽の光と、中村真理さんの温かい眼差しを受けながらの活動です。よかったら遊びに来てください！

◆2年　山田　将平

私がデス・エデュケーションの勉強会に参加しようと思ったのにはいくつかの理由があります。

一つは、自分自身が昔から死をタブー視していることに気がついたことです。

実家に帰った際、祖母が母親に自分の葬儀・お墓をこうして欲しいという話をしていることがありました。そこに居合わせた私は、

祖母に向かって「そんな自分が死んだときの話なんて不吉だからやめなよ」と言ってしまいました。その時は祖母の事を思って言ったのですが、後々になってとても後悔しました。祖母は私たちの為にそしてもちろん自分自身の為に葬儀やお墓の話をしていたのに、私はその優しさ、そして勇気を理解出来ていなかったのです。その時に自分自身が死をタブー視し、そこから無意識に目を背けている事に気がつき、同時に恐怖を感じました。将来、医師として日々患者さんの生、そして死と向き合っていかなければならないのに、このままで大丈夫なのかと…。

　このような事があり、私はこの勉強会を通して死生観について勉強し、死についての考えを持とうと思ったわけです。生・そして死はとても難しい問題で、決して正しい考えはないですが、これからはそこから目を背けず、きちんと向き合っていきたいと思います。

◆2年　田杭　千穂

　私が死生観について考えようと思ったきっかけは、今まで「死」について深く考えたことが無かったからであるのと、自分の将来を考えた時とても重要になることだと思ったからです。大学生活も2年目を迎え慣れが生じてきたのと共に、日々の暮らしの中で目の前の物事を解決することに注意が向いてばかりであると感じ、この死生観を考えることをきっかけに自分の方向性をはっきりさせたいと思いました。生き物に平等に訪れる「死」について考えることで自分の将来の医師像を細かく描くことが出来、また医師となった後も自分の価値観を支える一つになると感じたからです。また、「おくりびと」という映画の「死は別れではなく、門である」という言葉に大きな感銘を受け、デス・エデュケーションの勉強をしているからこそ、深く考えることができました。

　まだ直接「死」に触れたわけではないので、今は机上の空論のような部分も沢山あります。しかし現状を知ることで更に考え方も変わってゆきます。今はまだ活動を始めたばかりで自分のしたいこと、なりたい自分というのがはっきりしていない面もありますが、今後も様々な活動を通じて様々な価値観を知り、自分の軸となる考え方を構築していこうと思っています。

尊敬する医師　永井隆

2年　畠山　萌枝

　「己の如く人を愛せよ」というキリストの教えに生き、原爆の犠牲になりながら、平和を訴え続けた医師、永井隆博士を知ったのは、私が高校生の時だった。

　聖書から名付けられた「如己堂（にょこどう）」は、長崎では観光地の一つとして有名である。永井博士は原爆により被爆したあと、この地でわずか二畳ひと間の家で子二人と三人で暮らした。被爆による白血病に侵され寝たきりとなっても、ここで執筆を続けた。「働ける限り働こう。腕と指はまだ動く。書くことができるし、書くことしかできない」。彼が本を書くきっかけは、子供を養う生活費を稼ぐことであったが、約5年間で書いた17冊の著書は、事実を記録し世界に平和を訴え、長崎を再建させたいという意志に余りある偉業となり現在も貢献している。世界中で翻訳された著書、映画やテレビでも紹介され、毎年多くの人が訪れる長崎の地で彼の存在に出会う。

　原爆の日、永井博士は大学の研究室にいた。午前11時2分。猛烈な爆風が彼を襲った。倒れ積み重なってきた瓦礫から抜け出すと、そこには大勢の患者がうめき声をあげていたという。自身も出血多量で意識を失うほど負傷しながら、彼は一人でも多くの人の命を救おうとした。そうしてやっと彼が自宅に帰れたのは、3日目の夕方であった。一面焼け野原の中、彼は台所があった場所で灰色にまみれた黒い塊を見つけた。それは、最愛の妻の骨であった。「本当の平和をもたらすのは、ややこしい会議や思想ではなく、ごく単純な愛の力による」（著書『いとし子よ』より）。こんな悲惨な体験の後も病床の中で身動きできぬまま、人を赦し愛することを説いた。

　「この子を残して―この世をやがて私は去らねばならぬのか！」。これは、博士の著書の「この子を残して」の一節である。子供を残して死ぬことが彼にとってどれほど辛いことであったか、本のタイ

トルに続く一文が胸をうつ。永井博士には医師、被爆者、キリスト教の信者と多くの側面があるが、父親としての彼を強く印象付けられる。こういった親子の情は現在でも同じであろう。永井博士の父親の顔は、偉人のような彼を近くに感じることができる面だと思う。

時が経つにつれ戦争は遠のいていき、過去の出来事となっていく。しかし、戦争という悲惨な時を生き、後世にそれを伝えた永井隆という存在を忘れてはならない。最後まで医師であり、父親であり、キリスト信者であり続け、持ちうる力を人のために注ぎ続けた博士。彼の生き様やその著書に感動した人たちが、平和を求めた彼の意志を胸に刻む尊さを思う。

キリ文の図書にカバーをかけてくれている畠山さん（中央）

本棚から

「キリスト教文化センター所蔵資料（平成22年9月11日現在）」

書籍230冊（大型本除く）、DVD41本、CD8枚、ご希望により随時貸出ししています。

今回紹介のあった永井隆博士や、その他、遠藤周作や三浦綾子の小説なども取り扱っています。キリスト教や聖書のことに興味ある方、どうぞ気軽にお立ち寄り下さい。お待ちしております。

神学者ハンス・キュンクのこと

宗教学教授・フランシスコ会司祭
福田　誠二

キリスト教における神学という言葉は、日本の社会ではあまり馴染みがありませんが、宗教の真理性を問う論争の歴史、すなわち、神学という学問の歴史は、キリスト教が起こった紀元後一世紀の半ばから数えれば、約二千年あまり、キリスト教の母体であるユダヤ教から数えれば、少なくとも、三千数百年あまりを有するものとなります。そして、この神学という学問の歴史、すなわち、神学史には数多くの神学者が登場しますが、現代の最も著名な世界的神学者の一人がハンス・キュンクという神学者です。

ハンス・キュンクは一九二八年にスイスに生まれ、スイス人特有の多言語的才能にも恵まれ、早くから神学的才能を開花させる。一九五四年に司祭になり、一九六〇年には三十二歳の若さで大学教授となる。その二年後に始まった第二バチカン公会議という、百年に一回程度開催されるカトリック教会の最も重要な神学会議に、最も若い神学顧問として参加する。教皇、枢機卿、司教たちから寄せられる数々の神学的課題に対して、先進的な検討結果を提供する。第二バチカン公会議の最も重要な神学的課題は、旧態依然となっていた当時のカトリック教会を「アジョルナメント・根本から刷新すること」であった。ハンス・キュンクは、まず、十六世紀に分離したカトリック教会とプロテスタント教会の和解を試みる。さらには、七世紀までに分離した東方教会と西方教会の和解を試みる。さらには、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教などの聖書に基づく啓典の民の諸宗教の対話を試みる。そしてさらには、インドのヒンドゥー教、中国の儒教、および、アジアの仏教との対話を試みる。そしてついには、近世から始まった自然科学や種々の哲学やイデオロギー、そして無神論と呼ばれる思想的潮流と対話を試みる。ハンス・キュンクは常に時代の神学的課題を最先端でリードする。カトリック教会では歴代の教皇の書き物は常にベストセラーであるが、教皇以外では、ハンス・キュンクの著作は常にベストセラーとなる。

ハンス・キュンクの諸宗教対話の手法は、宗教における根本的な真理とは何かという「真理問題理解」にある。真理と非真理の間の境界は各々、自分の宗教や信念の中に存在している。すなわち、すべての人間は自分自身の中に真理と非真理の両方を持っている。それゆえ、真理を探究する者は、まずは自己の内の非真理を発見する必要がある。自己批判という作業があらゆる科学の第一の課題とな

る。自己の宗教・信念を自己批判できる者こそが、他の宗教・信念を批判的に理解できる。ハンス・キュンクの立場は、言い換えれば、自己の宗教・信念に係留された批判的対話という立場である。ハンス・キュンクは「宗教間の平和なしに、真の平和は実現されない」というテーゼのもとに、一人の宗教者としての課題を超えて、社会の様々な問題や課題に自己をコミットさせようとする。そして最終的に、「普遍的な判断基準として真に人間的なるもの」という「世界倫理プロジェクト」構想のもとに活発な活動を展開する。

私の専門は、中世のフランシスコ会学派に属するヨハネス・ドゥンス・スコトゥスという神学者の研究ですが、この中世の神学を現代神学に最も適応・応用させている神学者が、このハンス・キュンクという神学者なのです。この数年来、私はハンス・キュンクの神学研究を日本の学会で発表してきましたが、本年二月に、テュービンゲン大学近くにある研究所に彼を訪問してきました。昼食をはさみながら語り合った数時間は、私にとって至福の時でした。

「カトリック医療の原点、現在そして未来」

日本カトリック医師会　第26回日本カトリック医療関連学生セミナーへの参加報告

昨年本学が会場となったカトリック医師会主催「日本カトリック医療関連学生セミナー」が、今年は香川県坂出市にて開催され、**8**月**20**～**22**日間参加してきました。今回は「カトリック医療の原点、現在そして未来」というテーマで、キリスト教精神が創立母体にある病院がそれぞれ今後どうあるべきかを、カトリック医療の原点に立ち返るとともに問いかけるものでした。

一日目は、坂出聖マルチン病院病院長 井原彰一先生「リマの聖者マルチン・デ・ポレスに見るキリスト教医療の原点」、お告げのマリア修道会会員／医師 梅木公子先生「日本カトリック病院の歩み」。二日目は、愛媛労災病院 篠崎文彦先生「フィリピン・イザベラ州ギバン村における医療活動」、香川大学医学部看護学科 清水裕子先生「路上で生きる人の健康へのまなざし」の講演後、三日目にはグループに分かれて話し合いがもたれました。また、市民公開講座として、「こうのとりのゆりかご」で活躍中の慈恵病院理事長 蓮田太二理事長と看護部長 田尻由貴子氏の講演会があり、現代の日本社会が向き合う命の問題にひとつの課題をなげかけ、一般参加者とともに積極的な討論会がもたれました。

「病院にカトリックとしての精神がある、とは？」

もともと カトリック とは、「普遍的」を意味し、ギリシア語の**kat- holou**（すべてに即している）を語源とします。それは、様々な時代と民族の文化の中にあっても変わることのない福音の真理を具現し、「すべてに妥当する」の意味で使われている言葉です。ここから、カトリック的という場合、何もキリスト教世界のものだけに括られるものではなく、根源的な意味で「人間にとって共通な 普遍的 関わりがそこにあること」だと言えるでしょう。マザーテレサの言葉に「愛の反対は、無関心です」という言葉がありますが、今回のセミナーから、カトリック病院の原点にある「愛ある医療」とは、「一人一人の存在（心）を受け止め大切にする」という普遍的真理に根差したものであることをあらためて理解しました。そして、永井隆が「如己愛人（にょこあいじん）」というメッセージに込めたように、自分の如く他者を愛する、言い換えれば「自分の心を受けとめるように他者の心をも受けとめる精神」にこそ、人間の人格の唯一無二の存在に重きをおくカトリックらしさがある、と命について深く向き合う中で学んだ**3**日間でした。

来年のセミナーは、久留米の聖マリア病院で開催されます。カトリック系医科大学として、マリアンナからも多くの学生の参加が期待されています。セミナーはカトリック医療関連学生となっていますが、カトリック信者に限られるものではありませんので、ぜひふるってご参加下さい。

（キリスト教文化センター　中村　真理）

平成21年度の活動状況

写真&学生の声とともに紹介します

4月13日
新入生オリエンテーション

5月19日
新入生歓迎会
特別教育施設（聖堂）において、明石理事長のお話、マリアンナコーラスクラブ（**MCC**）の歌、フランシスコの祈りの後、会食。約**80**名の学生が集まる。

7月24日～26日
日本カトリック医師会主催「第二十六回日本カトリック医療関連学生セミナー」が、本学を主管校に教育棟と特別教育施設（聖堂）で開催された。

11月1日～30日
病院3階チャペル　片柳弘史神父「マザーテレサの写真展」開催

11月30日
教育棟**1**階ロビーにて『アドベントゥス・コンサート』開催

12月17日
教育棟**1**階ロビーにて『クリスマス・コンサート』開催
聖マリアンナ医科大学管弦楽団&マリアンナコーラスクラブ、そしてキリスト教文化センター有志メンバーによるコラボレーション演奏会。ハレルヤ楽曲では福田神父が指揮。

12月18日
クリスマスの集い
特別教育施設（聖堂）にて**MCC**協力のもとクリスマス会を開催。明石理事長のお話、福田神父の祈り、**MCC**との合唱後、会食。**100**名近くの学生・教職員が集まる。

12月24日　クリスマスイヴのミサ
12月25日　クリスマスご降誕ミサ

学生の声

■マリアンナコーラスクラブ部長
医学部4年　安達　裕之

私たちマリアンナ・コーラス・クラブ（MCC）は、新入生歓迎会、クリスマスの集いなどの行事でキリスト教文化センター（以下、キリ文）の方たちと活動をしています。MCCの日々の活動で歌の練習があり、その練習場所として聖堂や集会所を借りています。そのおかげで、普通に学生生活を送っているだけではなかなか会えないシスターたちとよく顔を合わせることができ、練習開始前や歓迎会の食事の時間などで一緒に写真に写ったり、談笑したりしています。シスターたちの優しい笑顔に癒されたい方は、年に数回ある行事に是非ともいらして下さい。

さて、実は昨年からキリ文主催の元、MCCとオーケストラ部で合同のクリスマスコンサートを教育棟の1階で行うようになりました。普段聖堂で歌うことには慣れているのですが、ほかの部と合同で、しかも学生だけでなく教職員の目の前で歌うことになり最初は緊張していましたが、いつの間にか普段どおり、皆でオーケストラ部の演奏に合わせて楽しく歌っていました。

ともに音楽を嗜む部でありながら普段はなかなか活動を共にする機会のない2つの部ですが、初めて同じ舞台に立つこととなりました。このような素晴らしい機会を与えてくれて本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

■4年　浜田　美帆

キリスト教文化センター（通称「キリ文」）は私にとって癒しの場所であり憩いの場です。今まではMCC（マリアンナ・コーラス・クラブ）部員として、聖堂で行われる集いでしかキリ文の方たちと繋がりがありませんでした。しかし、教育棟にキリ文が出来てから、私たちの距離はぐっと近づきました。

キリ文はいつ訪ねても笑顔で学生を迎えてくれます。気分転換をしたいとき、ちょっと時間が空いたとき、どんな理由でもいいのです。なにせ私が初めてここを訪れた理由は「ピアノがある！」でしたから。シスターや中村さんと話したり、ピアノを弾いたりすると疲れていた心があっという間に元気になります。そして様々なことを教えて頂けます。あるシスターからは「リボンで作る花」を教えて頂きました。一本のリボンから本物そっくりなバラの花が出来ると聞いたとき、驚きと同時に「私も作りたい！」と思いました。シスターは快く教えて下さり、今ではMCCの部員同士で教え合えるほどになりました。今年はこの花をコンサートの衣装や舞台の一部に使いたいと思っています。

またキリ文は様々な学年の人が訪れます。この穏やかな空間では学年関係なく皆が仲良くしています。実際私もここで知り合ったり話すようになった人が沢山います。そんな素敵な出会いがあるのもキリ文の魅力ではないでしょうか。

■2年　島田　雅仁

文章力がないので『キリスト教文化センター』であいうえお作文を作って、キリスト教文化センターへの僕の想いを表現したいと思う。では参ります。

キ…気楽に立ち寄れる
リ…りんごジュースはでないけどお茶で楽しくおしゃべり会
ス…素敵な女性陣に出会える
ト…時が経つのを忘れてしまう場所
教…教育棟の秘密のオアシス
文…文献もたくさんあるよ
化…化学よりも楽しい宗教学！
セン…先生やシスターとも交流できる
ター…た～くさん書きたいけど今日は ここまで

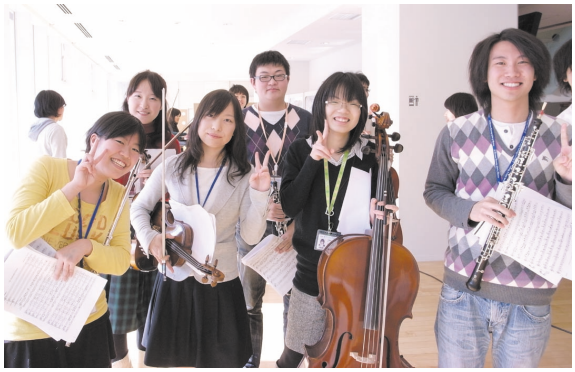
僕の想いは伝わっただろうか？最後に、このような文章を書く機会を与えて下さったキリスト教文化センターに関わるたくさんの方々に感謝を示したい。ありがとうございました。

■2年　甲田　英里子

私がキリスト教文化センターによく行くようになったのは去年の夏前。最初は宗教学のノートを提出するためだけでした。ですが、キリ文のお姉さんこと中村さんとお話するようになり、キリ文は私の癒し空間になりました。というのも、中村さんは一学生のちょっとした意見もちゃんと耳を傾けてくれますし、どんなにくだらない世間話にも付き合ってくれるのです。本当にお姉さんを持った気持ちになります(笑)。更に、授業時間以外であればピアノを弾いてもいいとのこと。昼休みや授業後によく弾かせてもらっています。

去年12月、キリ文からお声をかけていただき、教育棟ロビーで行われたクリスマスコンサートに私は管弦楽団として参加させていただきました。コンサートでは、クリスマスに因んだ曲をキリ文の演奏者の方やコーラス部と一緒に演奏しました。友人たちの前での演奏は、最初は緊張したものの、とても楽しくできました。観客の大半が学生で、知り合いの顔もちらほら…嬉し恥ずかしとはこのことか、と実感した瞬間でした。

そんな貴重な体験もさせてくれるキリ文。教室が遠くなった今もしょっちゅう遊びに行っています。学年に関係なく行ける場所なので、他学年の学生とも、時にはシスターとものんびり話をすることができます。それもなかなか貴重ですよね。この記事を読んでくださったキリ文にまだ行ったことのない皆さん、行って癒されてみてください。やみつきになりますよ(笑)。



編集後記

今回は、ふだんキリスト教文化センターに集う学生の声を集めての「キリ文」紹介とさせて頂きました。将来どのような医師になりたいのか、そのヴィジョンをもつためにも「デス・エデュケーションの会」を自ら立ち上げ、今学ぶべきことにまっすぐ向き合いながら現実を模索している彼らの姿に心打たれます。今後も教職員やシスター方との交流からどんな活動が芽を出し育っていくのか楽しみです。さて、日本に初めて「死生学」という概念を定着させたアルフォンス・デーケン師は、「死への準備教育」は、そのまま「ライフ・エデュケーション(より良く生きるための教育)」であると語っています。つまり、いのちとは時間であり、有限ないのちの尊さを意識すれば、それは「今という時間を大切に、精一杯いきること」を考える「命の教育」になるという事です。日本で唯一のカトリック系医科大学であり、キリスト教的人類愛を基盤に全人的医療の育成を目指す本学から、このようないのちに根差した勉強会が発足したことに大いに期待しています。

(中村)

発行　聖マリアンナ医科大学
キリスト教文化センター
〒216—8511
川崎市宮前区菅生2—16—1
〇四四(九七七)八一一一
編集　力　石　辰　也
印刷　城南印刷センター